

## 子供の資質・能力の育成を目指した校内研究の在り方

—学力向上アクションプランとの関連を図って—

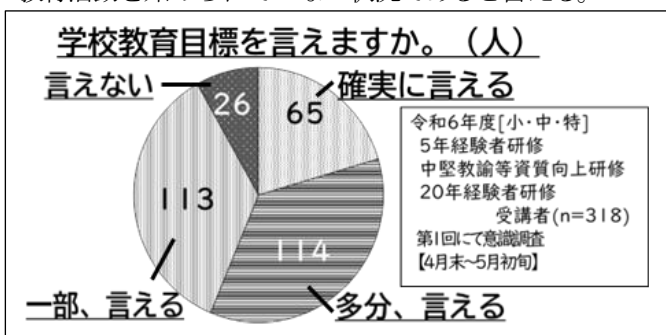
### 《研究の概要》

本研究は、子供の資質・能力の育成を目指した校内研究の在り方について、学力向上アクションプランとの関連を図り、日々の教育活動の質的向上を目指す方策を探ったものである。本市教職員の実態を調べると、各学校で育成を目指す資質・能力が示された学校教育目標やその具体像の共通認識が不十分であり、「日々の教育活動」「校内研究」「学力向上アクションプラン」が一体となっていない現状が明らかになった。そこで、資質・能力を整理・具体化した学力向上アクションプランの例示の作成と校内研究運営試案モデルの構築を行った。

### 1 問題の所在

「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会」（文部科学省 2024）は、これからの社会像や現状の課題を踏まえた資質・能力について、『知識及び技能』『思考力、判断力、表現力等』『学びに向かう力、人間性等』の三つの柱で資質・能力を整理したことは、これからの社会像や現状の課題を踏まえても基本的には妥当。しかし、これらの資質・能力については、理解のブレが見られ資質・能力の育成の障害ともなっているため更なる整理・具体化が必要」と述べている。

本市においても、[資料1]の結果にあるように、各学校で育成を目指す資質・能力が示された学校教育目標やその具体像を、学年や教科等ごとに整理、具体化して教育活動を始められていない状況であると言える。



[資料1] 令和6年度 経年研修受講対象者 意識調査結果

本市では、教育課程に基づいた校内研究が推進されていたり各学校で学力向上アクションプランを作成したりしているが、[資料1]の結果を踏まえると、日々の教育活動との連携・往還が図れておらず、子供の資質・能力の育成に十分な効果が得られていないと考えた。

### 2 研究の目的と方法

#### (1) 研究の目的

子供の資質・能力を、全教職員が共通認識のもとで育成するために、「日々の教育活動」「校内研究」「学力向上アクションプラン」を一体として捉える意識と、指導力の向上や指導観の転換を図る校内研究の在り方を追究する。

#### (2) 研究の方法

- ①育成すべき資質・能力についての校内の取組について、実態調査と課題の洗い出しを行う。
- ②育成を目指す子供の資質・能力の育成に向けた、日々の教育活動と学力向上アクションプランを有機的に結び付ける校内研究運営試案モデルを作成する。
- ③次年度、試案モデルの検証とポイントを整理し、市内学校へ子供の資質・能力を育てる校内研究の在り方について重要となるポイントを発信する。

### 3 研究内容

#### (1) 実態調査 (小: n=107・中: n=56)

令和6年7月に市内学校を対象に、校内研究及び学力向上アクションプランに関する調査を行った。

#### ①校内研究の代表授業の成果と日々の教育実践との関連

[表1] 研究主任による校内職員の見立て

	小学校	中学校
多くの職員が多くのことを活かしている	37校	25校
多くの職員がある程度しか活かしていない	42校	19校
一部の職員のみ多くのことを活かしている	26校	11校
多くの職員がほとんど活かし切れていない	2校	1校

ほとんどの学校で毎年行われている校内研究での代

表者による授業研究及び協議会において、「多くの職員が多くのことを活かしている印象である」と回答した学校が半数に届いていない現状である（〔表1〕）。

### ②校内研究の時間に多く語られ、見取る内容

〔表2〕 指導案検討で一番多く語られている内容

	小学校	中学校
手立てや支援の方法	81校	21校
授業の流れや流し方	6校	16校
ワークシートやICT	4校	5校
目標や授業後の子供の姿	7校	6校

〔表3〕 授業研究で一番多く見取られている内容

	小学校	中学校
手立てや支援の方法	84校	25校
授業の流れや流し方	7校	15校
ワークシートやICT	1校	4校
学習活動の工夫	0校	0校
目標や授業後の子供の姿	11校	6校

〔表4〕 協議会で一番多く語られている内容

	小学校	中学校
手立てや支援の方法	87校	22校
授業の流れや流し方	5校	13校
ワークシートやICT	1校	2校
学習活動の工夫	1校	0校
目標や授業後の子供の姿	10校	7校

どちらも、手立てや支援の方法についての内容が一番多く挙げられ、次いで、授業の流れや流し方となった。つまり、本時や単元の目標をどの程度達成できたのか、子供がどのように変容や成長をしたのかなど「子供を見ている」より、どのような手立てや支援をしているのか、どう授業を流しているのかなど、参観者の多くは、「教師を追っている」と言える（〔表2～4〕）。

### ③「教師を追う」ことによる弊害の可能性

参観者が「子供を見る」ことができれば、「資質・能力の育成につながったのは、〇〇の手立てが有効だった。」「◇◇のような工夫やより丁寧な説明を加えると下の学年でも活用・実践できそうだ」等、参加者の学びとなり、ひいては子供の育成につながるはずである。

しかし、「教師を追う」ことで、「本時の授業はよかった（うまくいっていなかった）」「ワークシートや発問の工夫がよかった（もっと◇◇したらよかった）」と、授業の表面的な部分しか捉えきれず、ひいては「学級（学年）の実態が違うから私の学級（学年）ではできない」

「この教科だからやりやすい」「準備の負担が大きすぎて、日々の授業では生かせない」と、代表授業の成果や課題が日々の教育活動に還流されていない現状が多くあると考える。

### ④学力向上アクションプランの作成・活用の現状

〔表5〕 学力向上宣言と研究主題の関連

	小学校	中学校
強く関連が見られる 研究主題と同じ	32校	24校
少し関連が見られる	30校	9校
関連が見られない	44校	21校

〔表6〕 学力向上アクションプランの作成方法

	小学校	中学校
全教職員で作成	36校	13校
管理職と各主任など 一部の職員で作成	28校	18校
管理職の指導のもと 担当者のみで作成	41校	20校

〔表7〕 学力向上アクションプランの活用方法

	小学校	中学校
校内研究に 反映させている	25校	22校
具体的方策を教育 課程に位置付ける	59校	16校
定期的なアセス メントを行う	50校	6校

※複数回答可、少数回答は省略

学力向上アクションプランに記載されている学力向上宣言と研究主題の関連については、小学校、中学校ともに、半数弱の学校で関連が図られておらず、校内研究とは別のものという認識で活用されている（〔表5〕）。

作成方法についても半数弱の学校が、管理職の指導のもと、教務主任が中心となって作成した後、教職員に周知し活用を促している現状である（〔表6〕）。

活用方法についても中学校で半数弱、小学校では2割強の学校しか校内研究に反映させて活用していない現状である（〔表7〕）。

具体的方策のキーワードを抽出して分析してみると、「ドリル学習」「反復練習」「家庭学習の充実」「夏季休業中の補習」といった基礎・基本の定着（知識・技能の習得）を学力向上と捉えて、方策を立てている学校が多いことがわかった。

### (2) 子供の資質・能力の育成を明確にする学力向上アクションプランの例示①・②(記入例)の作成

6 校内研究に関する研究

令和6年1月に[資料2]のように様式の変更がされた。しかし、上記にあるような方策に留まり、各学校で育成を目指す資質・能力が示された学校教育目標やその具体像を、学年や教科等ごとに整理、具体化して教育活動を行えているとは言えない状況にあると考える。

- ・【(2)本校児童生徒の伸ばしたい点や改善点】において、『学校教育目標や学校研究主題を意識』と追記し、様式に記入枠を設定
- ・【(3)学力向上に向けた具体的方策】において、『新年度の組織で内容・方策の確認と共有が重要』『新年度に変更の場合は報告』と追記

[資料2] 様式の変更点 令和6年1月29日教育指導課より発出

そこで、学校教育目標を基に資質・能力の具体化した姿を意識し校内研究主題と関連しながら作成を進めていくモデルとして「例示①・②(記入例)」を作成した。

① 「項目(1)本校の学力状況の傾向と分析」

多くの学校が、全国学力・学習状況調査及び千葉県学力状況検査の数値結果を重点に、傾向や分析したものを記載している。子供の学力を捉えるには、客観的データだけでなく、日々の教育活動を通して感じる教師の主観的データも重要となるため、[表8]のような項目をマトリクスで分析するようなモデルを示した。

[表8] マトリクスを用いた(1)本校の学力状況の傾向と分析

	全国学調・千葉県学力調査から	日常の学習活動の様子から
知・技		
思・判		
主学態		

② 「項目(2)本校児童生徒の伸ばしたい点や改善したい点  
—学校教育目標、校内研究主題を意識して—」

項目が—学校教育目標、校内研究主題を意識して—とあるのであれば、各学校で育成を目指す資質・能力が示された学校教育目標やその具体像を、学年や教科等ごとに整理、具体化した姿を示すべきと考えた。

例示①では、多くの学校の教育目標の柱となっている「知・徳・体」を項目として、学年(団)とのマトリクスで、<概ね満足できる姿>として具体化を図った。

例示②では、「主体的な学びの姿」「協働的な学びの姿」

「深い学びを実現している姿」の視点で、NITS(独立行政法人教職員支援機構)が作成したピクトグラム[資料3]を活用し、目標とする学びの姿の具体化を図った。

[表9] 項目(2)の例示①

	小:低学年 中:1年生 <概ね満足できる姿>	小:中学年 中:2年生 <概ね満足できる姿>	小:高学年 中:3年生 <概ね満足できる姿>
知			
徳	<概ね満足できる姿>	<概ね満足できる姿>	<概ね満足できる姿>
体	<概ね満足できる姿>	<概ね満足できる姿>	<概ね満足できる姿>

[表10] 項目(2)の例示②

主体的な学びの姿	協働的な学びの姿	深い学びを実現している姿
見通しを持つ	互いの考えを比較する	知識・技能を活用する
振り返って次へつなげる	共に考えを創り上げる	自分の思いや考えと結びつける

NITS 独立行政法人教職員支援機構

主体的な学び	対話的な学び	深い学び
興味や関心を高める	互いの考えを比較する	思考して問い続ける
見通しを持つ	多様な情報を収集する	知識・技能を習得する
自分と結び付ける	思考を表現に置き換える	知識・技能を活用する
振り返って次へつなげる	多様な手段で説明する	自分の思いや考えと結びつける
粘り強く取り組む	先哲の考え方を手掛かりとする	知識や技能を概念化する
	共に考えを創り上げる	自分の考えを形成する
	協働して課題解決する	新たなものを創り上げる

[資料3] ピクトグラム一覧

③ 「項目(3)学力向上に向けた具体的方策」

この項目が日々の教育活動に直結するため、例示①では(1)と(2)を掛け合わせて焦点化することを意識し、例示②ではそれぞれの学びの姿を具体化し、学年(団)との系統性を意識した方策を考え、例示を行った。

【学校全体(校内研究)を通しての取組や共通認識】

視点1 ○○を通して、~する姿を目指す  
 視点2 ◇◇を通して、~の資質・能力の育成を目指す  
 共通認識: 指名・意図的指名・相互指名を場面に応じて適切に使い分ける  
 子供同士の思いや願いをつなぐファシリテートを教師は意識する

【1年生】

(1) 学力状況の傾向と分析 × (2) 概ね満足できる姿  
 学年が上がることに発言する子、少ない子がはっきりとしている。      思いや願いを大切にできる子

(3) 具体的方策や共通認識  
 ・国語科及び学級活動を中心に教科等横断的な視点で、「伝えたい・聞きたい」場面を大事にし、国語科「話すこと・聞くこと」のア～オを意識した指導を行う。

[資料4] 例示①: 焦点化した具体的方策【小学1年生】



【学校全体(校内研究)を通しての取組や共通認識】  
 授業づくりにおいて、毎時1つ以上の意識や向上が図れる工夫や手立てを講じる  
 <見通しを持つ>  
 低学年:教師の発問に注視する姿勢、ノートや掲示物を見返す習慣を身に付けさせる  
 中学年:学習課題に対して、関連ある既習事項は何かを意識・把握できるようにする  
 高学年:教科等横断的な視点で学習課題を捉え、解決に向けての方法など、見通しを発言  
 や文字で表現できるようにする  
 <振り返って次へつなげる>  
 低学年:「頑張った・楽しかった」で終わらず、「次は・もっと〜たい」と発言や文字で表現でき  
 るようにする  
 中学年:本時でわかったこと・できたことを明らかにし、次時の活動や目標を発言や文字で  
 表現できるようにする  
 高学年:教科等横断的な視点で既習事項を捉え、次時以降の活動や目標、見通しなどを  
 発言や文字で表現できるようにする  
 <互いの考えを比較する>  
 低学年:自分の考えなどの表現に対する抵抗感なく、進んで交流できるようにする  
 中学年:考えるための技法を意識・把握しながら、進んで交流できるようにする  
 高学年:協働場面の目的と考えるための技法を捉え、進んで交流できるようにする  
 <共に考えを創り上げる>  
 低学年:共に考えを創り上げる楽しさやよさ、大切さを多く実感できるようにする  
 中学年:協働場面を通して、自他の変容や成長を捉えることができるようにする  
 高学年:自他の役割や立場を理解した協働場面を通して、自他の変容や成長を捉えること  
 ができるようにする  
 <知識・技能を活用する>  
 低学年:既習の知識・技能を活用することで課題解決できたと多く実感できるようにする  
 中学年:既習の知識・技能を活用して課題解決できた経験を積み重ねられるようにする  
 高学年:教科等横断的な視点で、既習の知識・技能を活用して課題解決できた経験を積み  
 重ねられるようにする  
 <自分の思いや考えを結びつける>  
 低学年:友達の良い考えを受け入れるよさや大切さ、自分の生活との結び付きを実感  
 できるようにする  
 中学年:互いの意見を尊重しながらすり合わせること、社会や生活と結び付けていくことが  
 大切であると理解できるようにする  
 高学年:互いの意見を尊重しながら効果的にすり合わせたり、社会や生活と結び付けて  
 考えて自己の考えを深めたりできるようにする

【資料5】例示②:系統性を意識した具体的方策

(3) 校内研究運営試案モデル

研究協力校での実践及び検証と研究推進校や文献の  
 研究を通して、目指す資質・能力の育成の推進が図られ  
 ている要因を整理・分析し、以下の七つの要素（[資料  
 6]）を意識し、実行することが大切であると考えた。

- 3 観点に基づいた **丁寧な子供の実態・課題把握**
- 育成を目指す **資質・能力の整理、具体化と共有**
- 該当教科等の **目標と見方・考え方の理解**
- 児童の学びと教師の学びは **相似形であるという意識**
- 研究を自分事と捉えるための **役割分担と強みの発揮**
- 代表授業者との **共同実践者・共同探究者のスタンス**
- 授業批評でなく、**成長や変容の共有と自他への還元**

【資料6】校内研究運営試案モデルの軸となる七つの要素

① 3 観点に基づいた丁寧な子供の実態・課題把握

学力検査や単元・定期テストの数値だけでなく、「ど  
 のように学びに向かっているのか」「どのように学びの  
 成果等を感じ、生かしているのか」といった主体的に学  
 習に取り組む態度についても、全国学力・学習状況調査  
 の質問調査等と日々の教育活動からの観察を重ね合わ  
 せて成果と課題を明らかにし、それらの課題を一体的  
 に捉え、子供主体の学習を実現できるよう研究・検証が  
 行われている学校に大きな成果が見られた。

② 育成を目指す資質・能力の整理、具体化と共有

【資料7】は、協力校が実施・作成した一部である。

は、研究概要で示した文言	
学校教育目標・めざす子どもの姿	研究主題
思いやりの心を持ち、意欲的に学ぶ高浜っ子 たくましい子・かわれる子・ほつらつとした子・ まなびあう子	「わからない」「できない」「わかった」 「できた」と言える児童の育成 ～かかわり合いを通して～
意欲的 【低学年】 ・新しいことに挑戦する。一人では無理でも、友 達と協力し合ったり、教師が手助けして、頑張ろ うとする児童。 ・苦手だと感じていることにも挑戦してみよう とする姿 【中学年】 課題に対し、どのようにしたら解決できるのかを 積極的に考えることができる。 【高学年】 学習材に対して積極的にかつ粘り強く学ぼうと する。	「わかった」 ◎（児童が日々の生活の中や体験活動などから 疑問に思うことから課題を設定し、その過程 で） ・体験や課題に対する自分の思いや考えを表 現する方法やよさ ・自分とは異なる他者の思いや考えを受け止 める方法やよさ 【低学年】 ・探究活動の方法や流れ 【中学年】 ・友達の考えに触れる。（自分にはない考え） ・自分の考えを伝える。→友達と確認し合う力 も必要。 【高学年】 ・友達の考えの中心となる部分を理解し、その 良さに気づいている。

【資料7】学年に応じた「めざす子どもの姿」

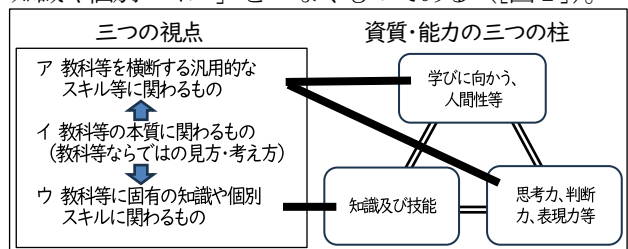
学習展開の工夫と成長や変容の省察に生かすことで  
 資質・能力の育成や授業の改善を図ることができた。

また、他の協力校での小学3年生算数科の検証授業  
 では、深い学びの姿として「知識・技能を活用する」姿  
 を目指した。既習事項を活用して問題解決する場面を  
 充実させたことで、具体的な知識だけでなく、「知識・  
 技能を活用する」よさや効果を強く感じる児童が増え  
 るなど、概念的な知識も獲得することができた。

中学の協力校では、教科ごとに、日々の授業の成果や  
 課題を洗い出し、概ね達成できている姿を共通認識す  
 ることで、個に応じた学習展開の意識の向上と生徒の  
 主体性を育む問いに目を向けた実践などにつながった。

③ 該当教科等の目標と見方・考え方の理解

学習指導要領の各教科等の目標の記述には、各教科  
 等の特質に応じた見方・考え方を働かせ、その教科の本  
 質的学習に必要な資質・能力の育成を図ることが述べ  
 られている。この「見方・考え方」は、文部科学省の論  
 点整理(2014)において三つの視点の一つ(図1イ)と  
 して示されたもので、育成を図る資質・能力の三つの柱  
 に関連している「汎用的なスキル」や「教科等に固有の  
 知識や個別スキル」をつなぐものである（[図1]）。



【図1】三つの視点と三つの柱の関係



#### (4) 考察

校内研究において、[図1イ] (p. 37) の教科等ならでは見方・考え方を意識し、[図1ウ] (p. 37) の教科等の固有の知識や個別スキルに関わるものの育成を図る研究が本市ではベーシックであり、在り方として根付いていると言える。

一方で、[図1ア] (p. 37) の教科等を横断する汎用的なスキル等に関わるものについても、予測困難な社会を生き抜くために必要な資質・能力として求められているものであり、カリキュラム・マネジメントの意識の広がりとともに重要視されているものである。そして、この資質・能力こそが学校教育目標として定める柱であり、整理、具体化をして目指す子どもの姿となる。

しかし、[図2・3]の結果に表れているように、校内研究の教科・領域や中学校の専門教科及び領域で育成を図った資質・能力から「他教科等でも活用できる資質・能力は何か」「これからの社会で生きて働く資質・能力は何か」といった視点で捉えられておらず、子供の変容や成長の見取り、教科等指導と教育活動の改善につながっていないと考えられる。

### 5 研究のまとめ

#### (1) 成果

市内学校への意識調査の結果分析や研究協力校での実態把握を通して、校内研究の取組や学力向上アクションプランの活用についての課題が明らかになり、資

質・能力の育成を目指すために、日々の教育活動と学力向上アクションプランを有機的に結び付けることのできるような校内研究の在り方を提示することができた。

活用が課題となっていた学力向上アクションプランについて、資質・能力を意識した例示を作成し、発出元である教育指導課に提案することができた。

また、次年度の校内研究の計画や運営等に向けて校内研究運営試案モデルを提示したことで、今後は研究協力校を中心に試案モデルに対する実効性を検証でき、目指す資質・能力の育成に向けた具体的かつ効果的なポイントを整理することができると考える。

#### (2) 課題

全教職員が[図1] (p. 37) 三つの視点と三つの柱の関係性を正しく理解・共有し、OODAループに基づいた教育活動を共通認識のもとで実践できるようになることが大きな課題である。これからの社会で生きて働く資質・能力を学校教育目標及びその具体像として掲げ、「日々の教育活動」「校内研究」「学力向上アクションプラン」を一体として捉える意識と、指導力の向上や指導観の転換をより一層図る必要がある。

資質・能力のよりよい育成を意識した授業によって子供が変わり、さらなる成長を目指して授業改善を行っていくような好循環を実感し、主体的・協働的に校内研究に取り組みたくなる在り方を追究し、汎用性の高い事例とそのポイントを発信していきたい。

#### 【研究組織】

○通年講師	千葉経済大学	非常勤講師	小池 公夫		
○研究協力校担当者	千葉市立西の谷小学校	教諭	古重 道人	千葉市立高浜海浜小学校	主幹教諭 井上 和子
	千葉市立磯辺小学校	教諭	平岩 広大	千葉市立幸町小学校	教諭 間山 弘典
	千葉市立松ヶ丘中学校	教諭	伊原 駿	千葉市立みつわ台中学校	教諭 大平 泰志
○所内担当	教育研究・総務班	若松 論 (担当)	金子 礼明	小倉 直子	元吉 佑樹

#### 【主な引用/参考文献等】

- ・文部科学省(2024)「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会(論点整理)」  
[https://www.mext.go.jp/content/20241003-mxt\\_kyoiku01-000038070.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20241003-mxt_kyoiku01-000038070.pdf) (2025. 2. 14 参照)
- ・田中耕治(2020)「シリーズ学びを変える新しい学習評価 理論・実践1 資質・能力の育成と新しい学習評価」ぎょうせい
- ・青木芳弘・嶋野道弘・齋藤博伸(2024)『授業は変えられる』東洋館出版社
- ・古舘良純(2024)『研究主任のマインドセット』明治図書
- ・田中博史・河内麻衣子(2022)『新しい研究授業の進め方』東洋館出版社
- ・尾崎正彦(2022)『算数の学校ができるまで』東洋館出版社
- ・田村学(2020)『問い、対話、振り返りによる中学校の授業改革』小学館

千葉市教育センター 研究紀要第33号

○研究名：校内研究に関する研究 ○研究対象：小・中・中等教育・特別支援学校  
○研究領域：校内研究、カリキュラム・マネジメント ○研究内容キーワード：資質・能力、学力向上、授業改善